

太田善麿君の「古代日本文学思潮論」に対する授賞審査要旨

古代日本文学思潮論は四冊からなり、第一冊は発祥史の考察として文学の発生を扱い、第二冊は古事記の考察、第三冊は日本書紀の考察、第四冊は古代詩歌の考察である。

太田善麿君は昭和十六年東京帝国大学文学部国文学科を卒業以来、専心日本書紀や古事記、万葉集の研究を行ない、その成果を発表し、本書をまとめるにいたつたものである。

発祥史の考察は四章にわかれ、従来の文学発生の諸説を検討した上で著者の見解をのべているが、日本文学の発祥的素地として開口発声饗礼の存在を説き、饗礼の実習内容として「うた」の成立をとき、文学思潮の前提条件として国語の特質や文字学習の経過を説き、文学思潮の背景として国語表記のあり方を追求し、文芸の成立経過を考察している。

古事記の考察は五章に分かれている。はじめに古事記序文にもとづく成立事情を扱い、帝紀と旧辞との関係のべ、稗田阿礼について「阿礼が負つていた本質的使命、任務というものが、新たな文献を成立せしめるために既成の文献を一度文献でなくするという点にかかつていた。」とし、古事記の撰修に成書たる文献資料が用いられたことは疑いの余地がないとしている。そうして太安万侶の古事記編修における役割を考察している。つぎに古事記の文章を考察し、古事記は国語散文を意識的に追求しようとしたとし、具体的に尊敬の助動詞の処理として「す」「たまふ」「ます」の考察を行ない、真名、仮名併用という表記の二元性を説いている。つぎに古事記に現われた色彩語彙を扱

つて、白、青、黒、赤が主であり、黄の欠如を説いている。古事記の神話と伝説では高天原の成立の意味と出雲神話の意味とを考察し高天原、日向神話と根国、出雲神話との対比として考えられている。さらに古事記歌謡詞章の独自性について考察し、古事記歌謡と日本書紀歌謡との詞句の異同を検討し、古事記の方がより歌謡らしい伝統をうけつぐとともに歌謡が古事記の本旨と密着していることを指摘している。また古事記歌謡に現われる「鳥」「をとめ」その他の語を調査し、そのもつ意味を考察し、さらに古事記歌謡詞章の文学性について扱っている。最後に古事記の文学史的定位についてのべている。

日本書紀の考察は六章に分かれている。はじめに日本書紀の成立を説くとともに日本書紀の本文や分注について考察し、書紀の区分現象と古事記との関係を扱っている。つぎに神代紀の上下二巻の独自性について説き、とくに海宮遊行神話を考察している。さらに日本書紀の歌謡を扱い斉明紀童謡について精細に考察している。

最後に日本書紀の編修と分担方式について扱っている。すなわち書紀収録の歌謡詞章における仮名の使用例を考察して書紀の区分現象を検討し、(イ)巻三―巻一三(神武天皇紀―安康天皇紀)、(呂)巻一四―巻二一(雄略天皇紀―崇峻天皇紀)、(イ)巻二二、二三(推古天皇紀、舒明天皇紀)、(ロ)巻二四―巻二七(皇極天皇紀―天智天皇紀)の四区分をなし、その中の伊、イの部分、即ち巻一から巻一三までと、巻二二、二三の部分とが古事記により多くの交渉を有しているのではないかと論じている。また巻二八、二九、三〇(天武天皇紀、持統天皇紀)はさらに特殊な変化のあることを論じており、さらに巻一、二(神代紀)は形式の上でも内容の面でも他の諸巻と趣を異にする点を挙げてゐる。一の例として「此其縁也」の形で掲げられる箇所が巻一、二だけで一五例もあるに対して巻三から巻三〇

までに一五例しかないと指摘し、神代紀がこの種の縁起由来を説き明かすことに一つの本領を見出していたことを証している。

古代詩歌の考察では六章に分かれ、万葉集の成立の意味を種々の角度から探求している。はじめに記紀等所伝の歌謡詞章の古代歌謡としての性格と音韻的特徴を説き、それが古代の和歌に継承される過程を考察しており、ついで万葉時代の現出から万葉集の成立の前提をなした和歌における定型の確立に至る問題を扱い、さらに万葉集歌における抒情性と叙事性の独自の相とその意味を探求している。さらに万葉歌が生み出され、それが支持される歴史的条件の一面を「ことだま」と「ことあげ」とを挙げて考察し、つぎに現在の万葉集が集として形成される点を巻一、二及び巻一三の構成をとりあげて考察し、終わりに万葉歌風の更新の問題として、旅人、憶良や家持を扱っている。

全体として基礎的な考察を精細に行なっており、ことに日本書紀の用字その他から見た書紀の編修と分担方式の研究は創見に満ちている。また記紀が文学として成立し、文学となりえていることを考察した点にもすぐれた見解が多い。ただ古代、文学、思潮などという対象を規定しているところが見えず、その論旨も書名と一致しないところがある。しかし言語活動、文献などを中心としてそれをめぐる様々の研究題目を探索し、熱心はその歴史的意義を考察している努力には見るべきものがあり、記紀万葉の時代の諸事実を明らかにする業績としては類の少ない労作であると認められる。